



石川 良介

『方広寺の梵鐘 姫路から大勢の職人』

京都、東山の麓です。慶長19年（1614年）4月16日、午前10時ごろ、鋳物師（いもじ）頭領の合図で溶けた銅が長さ40メートルもある4本の樋を降って、鋳型の上部中央にある湯だまり（鋳込み口）に真っ赤な焰を上げながら殺到します。灼熱の溶銅、136基の甑（こしき）とそれに風を送る踏鞴（たたら＝踏みふいご）の音、大勢の見物人も集まり、騒然とした現場です。全国各地から集められた、総勢3千人にのぼる職人達と鋳物師（いもじ）が大梵鐘の製作に大奮闘をします。鋳込みが終わり、温度の下がるのを待って鐘を掘り起こしたのは4月24日。5月29日に鐘楼の近くへ引き寄せ、1ヶ月で最終仕上げと銘文の陰刻（いんこく：鑿で文字を彫り込む）を施し、6月28日に鐘楼に吊り下げたと記録にあります。池の間二区の銘文の署名は以下です。

慶長十九年甲寅歲孟夏十六日

大檀那 正二位右大臣豊臣朝臣秀頼公

奉行 片桐東市正豊臣且元

冶工 京三条釜座名護屋越前少掾 藤原三昌

前住東福後住 南禅文英叟清韓謹書

この梵鐘鋳造に姫路野里の芥田（あくた）五郎右衛門が播磨の鋳物職人達、百数十人を引き連れ頭領の一人として参加しました。当時有名な多くの鋳物師が各地から招集されました。駿河江尻の長谷川、江戸の椎名伊予、伊勢津の辻但馬、大和五位堂の津田周防、奈良の沼津備前・松尾筑前、その他河内・摂津・和泉および下野天明などの鋳物師十一人が棟梁をつとめました。

姫路に戦国時代末期より、芥田五郎右衛門という郷土が住んでいました。加西郡芥田城の城主だったこともあります。代々芥田五郎右衛門を襲名し、播磨の鋳物師の棟梁を務めていました。（播磨国鋳物師惣管職）鋳物師としての三代目にあたる、芥田五郎右衛門充尙（家次）が方広寺の大梵鐘製作にかかわったのです。

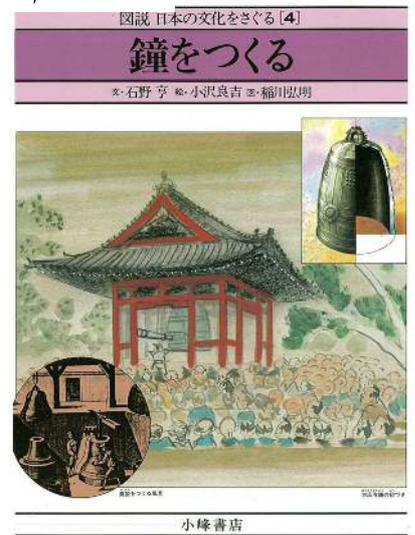
2003年に方広寺の梵鐘を見にいった時には、鐘楼内の足元に方広寺大仏殿の遺物9点として、鉄の杵などと共に風鐸とその舌（ぜつ）が各1個ころがっていました。それには三条釜座、名越の銘が刻まれていましたが2017年には風鐸が見当たりませんでした。

この鐘楼は梵鐘に目が行き、天井を見ることはあまり無いのではと思います。しかし、よく見ると鮮やかな青や赤、黄色の色彩が残っています。梵鐘のま下からズームレンズで撮影出来たら綺麗でしょうね。

今年（平成29年）の芥田 博司 様から頂いた年賀状に方広寺の梵鐘について『鋳立申候鐘之大キサたかさ覚』には『からかねの高壺万七千貫目』（約64トン）とあります。と教示頂きました。

参考資料

鐘をつくる	石野 亨	小峰書店	平成 7年（1995）
日本の梵鐘	坪井 良平	角川書店	昭和45年（1970）
播磨国鋳物師考 伝承の鞴	武内 貞	中央出版	昭和55年（1980）



鐘をつくる（図書）



風鐸に刻まれた銘



天井に描かれた絵（鐘楼）



方広寺の鐘楼

『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感

鉄を見る目がかかりますよ。

ぜひお越しください。



製銅カス
磁石にツイタ